

## 筆 幸 (風狂川邊の芽柳)

へ花咲きし 梅も昨日と散りかかる

残る寒さも身にしみて 憂きこと積もる幸兵衛が

手業に結いし筆よりも 細き煙を立てかぬる

我が身の上をかこち言

幸兵衛 へ如何なる前世の因果にや 壮年よりして今日まで

愚かなれども人倫の五常の道を堅く守り 悪い心は持たねども

世の盛衰と身の不運 ついにはかかる姿となり

零落なしては唯一人 尋ねてくれる人もなく 見下げ果てたる浮薄の人情

かかる不都合に不都合を 重ね重ねの我が薄命

日頃親子が信心なす水天宮の利益にて 夕べ凶らず二人とも幸いを得て嬉しやと

喜ぶ甲斐も情けない あ金の兵衛に持ってゆかれ 神にも見捨てられたるか

アア世にも儚ない身の上じゃナア

へ身のはかなさに越し方を思えば胸も閉じらるる

へお雪は傍へ探り寄り

お雪 へ今 父様のお言葉を傍でお聞き申しても 只悲しいともなく 見えぬこの目に泣くばかり

見えぬこの目に泣くばかり

へ私がこういう身でなくば 恥を忍びて苦界へ沈み

お雪 へそのお金にて父様の このご苦勞をお救い申せど 目が見えぬ故心に任せず

へどうぞこの目が治るよう位牌に向かい母様へ

お雪 へ朝夕お願い申せども するしの無いは治らぬか 思えば悲しうござりまする

へ妹も共に涙に暮れ

お霜 へ姉さん その様にお泣きてない 水天宮様へお願い申し

今に私の目が瞑れお前のその目が見えようから それを待って下さいまし

お雪 へオオ可愛いことを言ってくれるが 私のこの目が治ればとて

そなたのその目が見えなくなり 何でそれが嬉しかろう

父様のご苦勞増すばかり モ、そんな御願は掛けぬがよいヤア

幸兵衛 へ年端もゆかぬ二人の者にこんな苦勞をさせるのも俺の稼ぎが足らぬ故

足手まといの幸太郎を何処ぞへやろうと思えども 金を付けねば貰い手なく

それ故是非なく乳を貰い こうして育てているけれど

これがあつては活計を立てる筆さえ結う事ならず

お雪 へ私のこの目が見えますれば 乳を貰いに行きますけれど

お霜 へ年がゆかねど私では

幸兵衛 へ行こうと いても親がやられず

お雪 へ朝夕神様仏様へ

お霜 へお願い申せどおしるしなく

幸兵衛 へ見放されたる身の因果

兩人 へ父様

幸兵衛 へ娘、実に途方に暮れたわやい

へ吹けよ川風上がれよ簾中の小唄の顔見たや

へ弾く三味線の浮き立ちし 浮き名辰巳の送り舟

そのいにしえに深川の流れの水は変わらねど

いつしか変わる世の中に きぬく惜しむ山鐘も

今は沈みし無常音

幸兵衛 へ隣の家は息子殿の誕生の祝いとて太夫を呼んで浄瑠璃語らせ

飯にも千円万円の売り買いをする分限者と塀を隔ててこの裏家に

貧苦に迫るこの幸兵衛 同じ世界の人なるが身の盛衰と貧福は

こども違うものなるか

へ通し矢数に名の高き三間堂も墓所となり

影さえすごき弓張りの月も涙の汐ぐもり

幸兵衛 へ返らぬ愚痴を又言うようだが

男と生まれし身を以てさりとはい意気地のないことだが

死ぬより他に思案がない故 口へは出さぬがこれまでに

幾たびとなく覚悟はしたが

へ今此の親が死んだなら

後に残って目の見えぬお雪を始めこのお霜

幸兵衛 へとりわけ乳飲みの幸太郎 すぐに飢えて死ぬであろう

へ子の恩愛にひかさされエ、エ、て

幸兵衛 へこうしてその日は送れども 以前は士農工商と人の上に立つたる士族

子供が無くば切腹なし 立派に死をば遂げようもの

へ肌えを通す春の夜にそよぐ柳の川沿いに あわれを告ぐる鐘のこえ

お雪 へ今父様の仰有るのは 御尤もでござりまする

とても生きて居られませずば 私共も共々死にとうござりまする

武士らしい子供らを先へ殺して父様は御切腹をなされまして

立派にお果てなされませ

幸兵衛 へオオよく言ったよく申した さすがは武士の胤なるぞ

そちがそういう心なら親子一緒に死ぬであろう

お雪 へこれお霜 今父様のお言葉を聞いてであろう

そなたも一緒に死ぬであろうのオ

お霜 へアイ 父さんと姉さんと一緒なれば死にまする

これ坊や今に乳のあるおつかさんの所へ行かれるぞ

アレ幸太郎が嬉しいかニコニコ笑うて居りまする

幸兵衛へオオ幸太郎が笑うて居るか

へタベの雨に水増して深き小川の底見えし

浅き縁の砂村や茶毘の煙りと消えてゆく

へ親子は一世いつの世に 大智稻荷の逢うことも嵐のままに吹き折れし

へ十万坪の鬼あざみ これも冥土に縁ある 地藏菩薩の阿弥陀笠

幸兵衛へ武士の魂という大小まで貧に迫りて売り尽くせしが

家に伝わるこの短刀せめてのことにこればかりは

末々我が子に譲ろうと 今日まで残し置いたるが

これで親子が一命を捨てる刃物となつたるか

お雪へ父様どうぞ私を先へ殺して下さりませ

お霜へイ、エ姉さんより私を先へ

幸兵衛へイヤ誰彼と言おうより 足手まといの幸太郎を先へ殺し

それから二人を殺すほどに少しの内でもこの世の別れ

お念仏を申しておけ

兩人へアイ

へ涙ながらに手を合わせ 彌陀の名号唱うる折 これも修行の風につれ

へなまいだ

幸兵衛へ今殺されるも知らずして 無心に笑う幸太郎 どんな鬼でも殺されぬが

それを殺さにならぬとは 如何なる因果な事なるか

へ短刀投げ捨てカッパと伏すウウウ

へ音に驚き泣き出す赤子

お雪へヤこりや幸太郎を殺してか

お霜へイエ まだ殺しはなされませぬ

お雪へモシ父様 幸太郎を後にして二人を殺して

兩人へ下さりませ

へ右とへ左にへとオリイ すぎる

へ娘を手荒く突き退けて 幸兵衛すつくと立ち上がり

幸兵衛へフ、、、ハ、、、オオ出た 出た<<< 船幽霊だ 船幽霊だ<<

長刀搔込み現れ出で、

そも<<これは 桓武天皇九代の後胤 平の知盛幽霊なり

スッテン / << スッテンテン ハ、、、

お雪へモシ父様 お前どうぞなされましたか

幸兵衛へヤ どうもこうもあるものか 面白くって<<< 堪えられぬ ウワハ、、、

へ撞いてくりやんなハ幡鐘よ可愛いお人のお人の目を覚ます

へ撞いてくりやんなハ幡鐘よ可愛いお人のお人の目を覚ます

幸兵衛へウワハ、、、

お霜へ姉さんどうしよう

お雪へ三五郎さんを早くはやく

お霜へアイ、おじさん

へ呼ばれる声に路地口より三五郎は駈けきたり

三五郎へド、どうした

お雪へ父様が気が違いました

三五郎へナニ気が違った そいつは大変だ

幸兵衛へおのれ金兵衛覚悟なせ

へ打ってかかるを身を交わし その手を捕らえ引き据えて

三五郎へコレ幸兵衛さん

幸兵衛へ幸兵衛とは誰がこった

三五郎へ誰でもねえお前のこった心を確かに持ってくんねえ

幸兵衛へ心は確かに持っている 落とさぬ様に財布に入れ 首に掛けて持っている

三五郎へ仮にもそんな冗談を言ったことのねえお前が

どうしてそんな気になったんだよオ

幸兵衛へなったが悪けりや謝ろう コノ馬鹿野郎め

三五郎へチエーなんて情けねえ事だなあ

あんまり律儀な見から一途に迫って気が違ったんだろうが

お前も元は武士じゃねえか 心を広く持ちなせえ

一つ長屋に住むよしみ 日に一貫や二貫位はこれから助けても上げようから

心を確かに持ちなせえ 言わずと知れた事だけれど

手助けになる姉さんは目が見えず 妹はまだ子供

それに赤ん坊は 乳が無けりや一日だつて育てる事ならねえのは

お前もよく知っていないさるだるうに

年端もゆかねえ子供達に 苦勞をかけて嬉しいのかイ

オウ、お前この子供達が可愛かねえのかヨオ

幸兵衛へ可愛くなくてなんとしよう

三五郎へそうだろう

へ可愛い我が子が目を覚まし 泣くがしよざいか磯端に

往きつ戻りつ 戻りつ往きつ 羽音に狂う小夜千鳥

三五郎へオオあぶねえ 子供を放り出す奴があるものかい

幸兵衛へこれも誰ゆえ 金兵衛ゆえ

へたちまち変わる発狂に

薪を取って打ち下ろせば 額も徳利もばら

幸兵衛へオオお祭りだ、ハ幡様のお祭りだ

三五郎へ馬鹿言いねえ 今時分 祭りなんぞあるもんか ありやあお前 近所の狸囃子だ

幸兵衛へチキリンチャン、チキリンチャン

お雪へ父さま

幸衛 へどれ 幸太郎に見せてやろう

三平 へオオあぶねえく 赤ん坊を抱いて何処へ行くんだ

幸衛 へはなせ

三平 へアあぶねえヨ

幸衛 へハツはなせ

三平 へあぶねえッてばヨオ

幸衛 へエ、放せ

三平 へあッ ウーン

へ鐘に追われて 走りゆく。